

『風の約束』

著作 a s h

※この話は『kanon』を元にした二次創作です。

※なお、真琴シナリオについてのネタバレに該当する恐れがあります。

春の到来を予感させる日、真琴は水瀬家に帰ってきた。

秋子さんも名雪も、そのことを実に簡単に、そして平然と受け止めている。以前に真琴の正体を二人に話した時と同じように。

ただ、二人がこの先の真琴の成り行きまで考えているかは、俺には分からない。もしかしたら、また真琴がいなくなると思っているのかも知れない。また高熱を出したりすると思っているのかも知れない。

だけど、そんなことは二人の態度からは全然感じられなかった。現に、真琴が再び水瀬家の玄関に入った時、

「あ…真琴、帰ってきたんだね」

名雪は真琴の姿を見るなり、そう言って笑ってみせた。

「そうなの。それで、今日は真琴が食べたと言って肉まんにするから」

真琴を問にして、秋子さんも笑う。

「うんっ、つくまーん！」

『風の約束』

すっかり秋子さんに懐いて、元気な笑顔を見せる真琴。

真琴がどれだけの記憶を持っているかは、商店街からの帰り道だけでは詳しくは分からなかったものの、ほとんど覚えていないようだった。

それでも猫のことや秋子さん、それに俺のことはかすかに残っているらしく、「帰る」と言われて、特別それを疑うようなしぐさは見せなかった。まあ、真琴のことは機会を見て、話でも聞けばすむだろう。俺にしても、疑問に感じることはないわけじゃないし。

こうして、ごく簡単に対面がすむと、俺たちはそのまま居間へと場所を移したのだが、「わたしも夕食の準備を手伝うね…ツクシユン！ あれー？」

いきなり名雪が涙目になりながら、鼻を押さえている……って、そうだ。ここには真琴と一緒にびろがいるんだった。

「おい、真琴。お前先にびろのやつを部屋に置いてこいよ」

まだ少し落ち着かないのか、きょとんと名雪を眺めていた真琴に俺が声をかけると、真琴は自分の手に抱いているびろに視線を落とす。

「びろ？…って、この子の名前？ ふーん…何か可愛い名前ね」

可愛い名前はいいんだけど、そこでゆっくりとされても名雪の症状がひどくなるばかりだ。

「うー…別に一緒でもいいよ。わたしだってたまにはびろといたいし…」

そう反論しながら、名雪はすでに猫アレルギーの諸症状を見せている。そんな状態で手伝いなんかできるわけがないのに。

「涙ぼろぼろ鼻水ぐしぐしくシヤミ連発ってな状態で、メシの支度をする気なのか、お前

『風の約束』

は？」

「…マスクするよー」

「駄目だ。真琴、とつとと上がってびろ、だけ置いてこい…って、そう言や、お前も会った時にクシヤミばかりしてたな？」

と俺が言うと、秋子さんがそれに続く。

「そうね。真琴も一度着替えさせた方がいいわね。それじゃ、わたしが真琴を部屋へ連れて行って着替えさせるから、祐一さんは名雪をお願いね」

「分かりました」

秋子さんにうなずきながら、俺が名雪の様子を見ると、鼻に手を当てながら名残惜しうにびろを見つめていた。

「ねこー…」

ここで放っておけば、そのまま真琴たちについていきそうな様子だ。

「あきらめろって」

と俺が名雪を止めるように肩に手を置くと、それを確認してから秋子さんが動き出す。

「さ、真琴、こっちにいらっしやい」

「う…うん……」

名雪の様子にとまどいを感じたのか、真琴はしきりに名雪の方を気にしながら、秋子さんの後について二階へと上がって行った。

もちろん、その間も俺が名雪を抑えていたのは言うまでもない。もし手を離したら、こいつは二階まで行くに決まっている。

『風の約束』

やがて真琴の姿が見えなくなると、名雪はがつくりと肩を落として、さも残念そうにつぶやいた。

「あー…行っちゃった…」

「しょうがないだろ？」

なだめるように俺が言っても、名雪は納得していないようで、口を「へ」の字にして不平をもらす。

「せっかく一緒にいるのにー」

「しょうがないだろ？」

「祐一、それ二度目だよ…」

「そうは言っても、ホントにしょうがないじゃないか」

「…三度目…でも、そうだよね…」

二度目だろうが三度目だろうが、名雪が猫アレルギーなのはしょうがない。いくら猫が好きでも、一緒にいるのは名雪にとってもつらいことのはずだ。

「とりあえずお前も顔とか洗ってこいよ」

「うん、そうする…」

そう言ってトボトボと洗面所に向かう名雪の背中へ、言いようのない寂しさを漂わせていた。確かにちよつとかわいそうな気もするけどな……。

その後、着替え終わった真琴と秋子さんに、アレルギーの症状もどうか治まった名雪が加わって、夕食の支度が始まった。

珍しく真琴は自分から「手伝いをする」と言ったらしいが、そうは言っても真琴に料理

『風の約束』

ができるかどうかは甚だ疑問に感じるところだ。まあ、秋子さんたちが一緒だから、変なものを作ったりはしないだろうけどな。

ちなみに、夕食のメニューは真琴のリクエスト通りの肉まんだ。もつとも、それだけじゃなくて、秋子さんの手によるさまざま中華料理の皿や、やたらと不格好なサラダが並んでいた。

「へえ、肉まんって言っても、こうして並ぶと豪勢だな」

食卓を見た俺が、思わずため息混じりにつぶやくと、真琴が得意げな表情でそれに答える。

「真琴も手伝ったんだから、当然じゃないのっ」

「って言っても、お前が作ったのは……この妙に野菜の大きさが不揃いになってる不格好なサラダだろ？」

さっきから気になっていた不格好なサラダを指さすと、真琴は俺をにらみつけながら、反論をした。

「不格好じゃないわよっ！ ただ、ちょっと、包丁が大きすぎただけなんだからあつ」

包丁が大きすぎるって言うなら、小さいものを使えばよかったのに……と言おうかと思っただところに、名雪が入ってくる。

「祐一、大事なものは見かけじゃないよ」

「味か？」

「ううん、味も大事だけど、それよりも作った人の気持ちだよ。真琴は本当に一生懸命やったんだから」

『風の約束』

「うーっ…」

俺を非難するような名雪と、にらみつけるような真琴。：いや、まあ、別に真琴の料理をけなすつもりはなかったんだけど、確かに俺が言いすぎたな。

「悪かったな、真琴」

「いいわよう……祐一にはあげないから」

そう言うとき真琴は、ぶいっと横を向いてすねるしぐさをする。

「すねるなって。お前が料理をするなんて、全然想像できなかったんだ。そうだな、たとえてみると名雪が陸上部の部長って言うくらいにな」

「あうーっ……よく分かんないわよう」

「えー？　なんでわたしが出てくるの？」

「二人とも細かいことは気にするな」

「気にするよー」

と、そこへ秋子さんの声。

「ほらほら、みんな揃ったんだから、夕食にしましょ」

「そうですね、秋子さん。ほら、名雪も」

「うー、気になるよー…」

名雪は相変わず納得していない様子だったが、真琴の方はすでに俺のことなんか頭にないらしく、

「うんっ！」

と元氣よく秋子さんに答え、自分が座る場所へと向かう。そして、思いのほか豪勢な夕

『風の約束』

食のひとつが始まった。

秋子さんと名雪が作った数々の料理は、もちろん文句のつけようのないほどのうまさだったが、意外にも真琴の作った不格好なサラダもうまかった。まあこの味付けは秋子さんが見てくれたんだろうな、きつと。

真琴は秋子さん特製の肉まん（正しくは別の呼び方があるのかも知れないが、まあ、こっちの方が分かりやすいからな）を、立て続けに二、三個手にしながら、本当に嬉しそうな表情をしている。何て言うか、本当に分かりやすいやつだな、こいつも。

「なっ：なによう」

俺の視線に気づいたのか、真琴が両手に肉まんを持って、少しだけ恥ずかしそうに言った。

「別に誰も取りやしないから、両手に食いかけのを持つことはないだろう？」

俺が苦笑いとともにそう言うと、真琴は全然気にする様子もない。さっき恥ずかしそうにしていたのは、何だったんだろうって思うくらいだ。

「いいじゃないの！　だって、秋子さんの肉まん、おいしーんだからあ」

「ありがとう、真琴。まだたくさんあるから、どんどん食べてね」

「うんっ！」

「祐一さんも、遠慮しないでね」

遠慮しないでって言われても、別に遠慮してるつもりはない。そもそも、俺だってすでに肉まんを三つほど平らげている。だけど、他の料理もあることだし、それだけですますわけにはいかないと思う。

『風の約束』

「ええ、そりゃまあ…」

しかし、俺が控えめな返事をしたそばで、真琴は両手に持っていた肉まんをきつと平らげて、元気に手を上げた。

「秋子さん、真琴におかわりーっ！」

「おいおい…お前、そんなに食べるのかよ」

「祐一はうるさいのっ」

いくらこいつの腹が普通のと出来が違ったとしても、それは明らかに食べ過ぎだと思っ
が、秋子さんも真琴を止めるつもりはないみたいだし、当の本人が好きで食べたいと言っ
てるのだから、俺があえて止めることもないか。

「ま、いいけどな…」

後で自分が腹痛で泣きを見るくらいのは、真琴にも十分予想できてるだろう。

「…いや、待てよ？」

こいつのことだから、そんな後のことを考えるよりも目先の肉まんにとらわれているっ
て可能性は否定できないな。

「後で『お腹イタイ』って騒ぐなよ」

「真琴、そんな子どもじゃあないっ！」

その後、真琴は俺の忠告に逆らうかのように、秋子さんに肉まんをおかわりし続け、結
局一人で六つほど食べていた。

一体誰がそんな子どもじゃないって？ そんなあまのじゃくなヤツのことを子どもと言
うんだがな…まあ、いいや。

『風の約束』

その後、みんなの箸が動きを止めても、食卓の上にはまだ料理が残っていたが、さすがに真琴もそれ以上は手を出そうとはしない。

しばらくしてから、秋子さんがゆっくりと片づけを始めると、真琴もゆっくりと立ち上がって、

「ごちそうさまっ！」

と元気に言うとすぐに、二階へと駆け上がって行った。

「今日はみんなよく食べてくれて嬉しいわ」

真琴が席を立った後の食卓を見回しながら、秋子さんが本当に嬉しそうに言った。まだ幾つかの皿には料理が残っていたが、それでもかなり食べたはずだ。現に名雪も椅子にもたれながら、少し苦しそうにしていた。

「ほんとだよね。わたしもお腹一杯……」

「祐一さんもお腹一杯ですか？」

余裕があるならまだ食べてくださいと言っても言いたいんだろうけど、さすがに俺でもこの量は多い。

「おいしかったけど、さすがにこの量は多いですよ、秋子さん」

「それはよかったです」

俺の「おいしかった」に対するものなのか、「たくさん食べた」に対するものなのか、秋子さんが笑顔でそう言ってくれた。まあ、両方なのかも知れないけどな。

「ホントにごちそうさまでした」

俺も片づけをしようと思って、そう言いながら席を立つと、名雪が食卓をぼんやりと眺

『風の約束』

めながら、独り言のように漏らす。

「でも、あの子大丈夫なのかな？」

名雪の視線の先には、真琴が食べたと推測される料理の皿の数々が重ねられている。確かに、肉まんの数にしても、他の料理にしても、真琴の体格を考えたら食べ過ぎなのは間違いない。

さっきの俺の忠告にしても、素直に聞くようなやつじゃないな。だからと言って、それで放っておくつもりもないけどな。

「後で胃薬でも持ってってやるよ」

「そうだね、祐一」

「そう言うお前は平気なのか？」

「うー…ちよつとつらいかも…」

困ったような（と言っても、あまりそうは見えないのだが）表情の名雪に俺は小さく苦笑いをしてから、胃腸薬を取りに行った。

そして、名雪に一回分を出してやってから、胃腸薬のビンを持ったまま二階へと向かう。

真琴（と、びろも一緒にいるはず）の部屋の前に行き、軽くノックをして、返事を待つことなくドアを開ける。

「真琴、入るぞ」

部屋の中は薄暗い状態だったが、自分の下の方から真琴の声がする。

「あっ…祐一」

「何だ、お前もう寝てるのか？」

『風の約束』

寝てると言っても、横になつてただけだと分かっていたので、俺はすぐに部屋の照明を点けた。

すると、明るくなつた部屋の中、布団にくるまってゐる真琴がいた。布団や着替えは夕食前に秋子さんが用意してくれたものだろう。

「ちょ、ちよつと眠たくなつただけよお」

「それならちゃんと風呂入つてからにしろよ」

そりゃ食べ過ぎでしんどい状態では、風呂なんか入れるわけはないだろう。そんなことも十分承知していたが、真琴がどんな風な反応を示すのか、興味があった。

「お風呂……」

急にしょぼんとする真琴。やっぱり予想通りの反応だった。

「どうかしたのか？」

「あうーっ……お風呂、今日は入らない……」

「そうか」

「うーっ、用がないんだつたら、祐一は出てって！」

ぼつが悪そうにしながらも、俺に当たる姿は全然変わらない。そんな姿を見た俺はこれ以上からかうのも悪いと感じ、本来の用件を果たすことにした。

「そうだな。まあ、これをお前に渡したかっただけだからな。ホラよ」

そう言つて、俺が胃腸薬のピンを渡すと、真琴はそれをきよとんとした様子で見つめるだけだった。

「なに、これ……」

『風の約束』

「胃薬だよ。それ飲んでおとなしくしてろ」

「薬…やだなあ」

「それくらいは飲めるだろ？ それとも甘いやつの方がよかったか？」

俺が持ってきたのは普通の胃腸薬で、いわゆるお子様向けのシロップとか糖衣錠みたいなやつじゃあない。そもそも、そんなのがこの家にあるのかどうかも知らないけどな。

「ぼつ、馬鹿にしないでよっ！ これくらいポイツと飲めるわよう」

威勢よく答えてはいるものの、それは真琴の強がりではないのは分かっていた。だが、俺がそれ以上ツツコミを入れても、事態が進むものでもない。

「それなら問題ないな？ じゃあな…」

俺は真琴の部屋から出ようと思ひ、体をドアの方へと向き直したが、不意に背中を引っ張られる感触に体が止まった。その感触に俺が後ろを見ると、真琴が俺の服を掴んでいた。

「って、おい」

真琴に向かい合うようにしながら、俺は真琴の手を取った。が、別にそれに逆らうような行動は見せずに、うつむいたままぼつりと俺を呼んだ。

「…：…祐一」

「何だよ？」

俺が短く訊き返すと、真琴は視線を合わせることなく、そのまま独り言のように言葉を続けるだけだ。

「…：…真琴、本当にここにいでもいいのかなあ？」

うつむいて俺に手を預けたままの真琴は、心なしか震えているようにも見える。強がっ

『風の約束』

てはみても、やはり不安でしようがないのだろう。

そもそも記憶が曖昧な状態なのに、ここでの暮らしを何の疑いもなく受け入れること自体が無理なのかも知れない。だけど、真琴はここに帰るべくして帰ってきたんだ。それはウソなんかじゃない。

「秋子さんだって名雪だって、そう言ってるじゃないか」

「うん……だけど……」

「もちろん、俺だってな」

「……ホントに？」

上目づかいに俺に訊ねるしぐさは、捨てられたベットのような心細さを感じさせる……って、そうか。こいつは一度それを味わってるんだ。だけど、そんなことはもうしない。真琴をそんな目にあわせたりはしない。俺は自分の気持ちを、強く短く答えることで示してやった。

「ああ」

「真琴……今日、何であそこにいたのかよく分からないの……。それまで何をしていたのかも……。でも、この猫……ぴろや祐一、それに秋子さんのこと……見た時に何だか不思議な気持ちになったんだ……」

「それはそうだろうさ」

「どうして？ 祐一もみんなも、真琴のことを知ってるみたいだけど、真琴は自分のことがよく分かんないよう……」

不意に真琴が俺から手を離し、ぎゅっと拳を固めたかと思うと、それを力なく俺に当て

『風の約束』

てきた。

「ほこ、ぼこ…なんて言うほどでもない。もちろん、痛くもかゆくもない。

そんな風な「叩く」と言う表現とかけ離れた真琴の拳を受けながら、俺はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「大丈夫だって」

その言葉で、真琴の手の動きが止まる。

「それに…：よく思い出せないんだけど、真琴…何かの約束を誰かとしたような気がする…」

「約束？ 何の？」

真琴の言ってる約束が何なのか、俺には思い当たる節があった。それはたぶん俺との約束だろう。それはそれで、思い出されるのもちょっと恥ずかしいものだけど、真琴の方は至って真剣だった。

「あうーっ…それもよく思い出せない…」

「あんまり悩むと禿げるぞ」

「うーっ…それはイヤだあ…。でも…」

俺の冗談を真に受け、一瞬イヤそうな表情をしてみせたが、それでもやっぱり気になる…という様子は隠せない。やれやれ…と呆れると同時に、俺はふと思いついたことがあった。

「もし、そんなに気になるんだったらな…」

「祐一は何か知ってるの？」

『風の約束』

「いや、はっきりとは答えられないけどな」

「うん」

「丘に行ってみるか？」

唐突に真琴に丘のことを切り出すのは、もしかしたら時期尚早だったかも知れないが、今ならあそこに行っても真琴に特に悪いことはないと思う。いや、はっきりとした理由なんて、それこそないのだが。

「丘？」

「ああ、ものみの丘って呼ばれる場所だ。…明日学校が終わったら、天野も一緒に連れて
さ」

「天野…って誰？」

きょんとんとしてる真琴が、さらに首を傾げている。どうやら、天野と言う名前も分からないらしい。無理もないか、天野と会ったのは本当にわずかな間でしかないし、それも消える寸前だったからな。

「お前の友だちじゃないか」

「あうーっ、思い出せない……」

先ほどから肩根が下がりっぱなしの真琴だが、少なくともあの状態で天野とは友だちになれたのだから、今さら心配することはないだろう。

「会えば分かるって」

「そうかなあ……」

『風の約束』

俺が短く答えると、真琴は少しだけ安心したのか、かすかに笑った。その表情からは、まだ不安は拭いきれないものの、ひとまず大丈夫だろう。

「ああ。それじゃ明日、学校が終わる頃に校門まで来れるか？」

「うん…たぶん分かんと思う…」

「じゃあ、ゆっくり休めよ」

そう言って俺が部屋から出ようと向きを変えると、背中に真琴の声が届く。

「あ…ありがと…：…祐一」

背中を向けたまま、俺は軽く手を上げて答え、部屋から出て行った。

その足で台所まで行き、秋子さんに真琴の様子を手短に告げると、俺は自分の部屋へと向かった。

翌朝、俺が朝食を食べている時には、真琴の姿は見えなかった。秋子さんに訊くと、まだ調子がよくないらしく、「朝食はいらない」と言ったそうだ。

そんな状態だったので、今日のことをちゃんと覚えていく心配だったが、昨日の真剣な様子を思えば、いくら真琴でも大丈夫だという結論に至り、いつものように名雪と一緒に学校へと向かう。

さほど変わり映えしない授業を適当に聞き流して、昼休みになるとすぐに俺は天野のところへと向かった。

下級生の中に入っていくのはちょっと勇気があるが、今はそんなことを気にしてる場合じゃない。天野を呼び出した後、学食で買ったパンを持って中庭の階段へと向かう、真琴のことを話すため。

『風の約束』

しばらく後。

「——と言うわけなんだ、天野」

買ってきたパンとジュースを交互に口に入れながら、俺が真琴のことを大まかに話し終えた時、心なしか天野の表情は固くなっていた。

「相沢さん」

「何だよ？」

「あの子…真琴は、本当に戻ってきたんですか？」

そう訊ねる言葉も心なしか、固い感じがする。信じられない、と言うような表情ではないものの、どこか釈然としないようなのだ。

「ああ。俺もびっくりしたけど、あれは夢なんかじゃないと思うぜ」

「…：わたしは相沢さんがちよつと羨ましいです」

そうして天野は顔を伏せるようにする。天野が俺のことを羨ましいと言う理由なんて、俺にも分かっていた。だけど、俺はそんな天野に何をどう言えばいいのか分からない。

それでも、天野はすぐに顔を上げると、言葉を続けた。

「でも、真琴が戻ってきたと言うなら、わたしも嬉しいです。だって、あの子とは友だちですから」

「…：そう言ってくれて助かるよ」

俺が小さなため息混じりに漏らすと、天野もかすかに笑う。それは文字通りに微妙な笑みだったが、それが今の天野の笑顔なのだ。

「そう言いながら、相沢さんはわたしがそう答えるのを見越してるんじゃないですか？」

『風の約束』

「まあね」

あの状態の真琴に真剣に接してくれた天野だからこそ、俺以上にっらい別れを経験した天野だからこそ、俺は確信していたんだ。

「もしも、わたしがそう思っていない、と言ったらどうしますか？」

「天野はそんなことは言わないからな」

「ずるいですね」

「天野がそんなことを言うようなやつだったら、真琴と友だちになれはしないさ」

「そうかも知れないですね。…ところで、相沢さん」

「ん？」

たわいのない会話を少し続けた後、天野はまた真剣な表情に戻っていた。俺としてはもう少し続けていたかったけど、しようがない。

「あの子は……この先どうなるのですか？」

「それを確認しに行こうと思ってるんだ」

真剣に訊ねる天野に対して、俺も真剣に答えた。この先どうなるか、と言う天野の疑問は当たり前なものだし、それを踏まえてこうして天野に話をしてるんだからな。

「確認ですか？」

「ああ。昨日のうちの何となく確認はとれたような気もするんだけど、やっぱり真琴と天野にも確認してもらいたいからな」

「確認って何をですか？」

「一瞬の煌めきなんかじゃなくて、ずっと真琴と一緒にいられるようになったこと、さ」

『風の約束』

真剣に俺はその時思っていたことを口にした。思っていた、と言うよりは確信していたことでもあるが、それを聞いた時の天野の表情は複雑だった。

「相沢さん…」

嬉しいのか悩んでるのか困ってるのか。あるいはみんな含まれているのか。とにかく天野の口から、次の言葉が出てこない。

「何だよ、その複雑な表情は」

「いえ…すみません」

「そもそもお前の言葉から始まったんだぞ」

「え？」

今度はさっきの複雑な表情にさらにとまどいを加えたようになり、天野の動きが止まる。

「昨日訊いたじゃないか、俺に『相沢さんなら何をお願いしますか？』って」

「ええ、訊きました。けど、それは…」

「その時、天野は何を思った？」

「そ、それは…」

なおもとまどう天野だったが、真剣に困ってるようでもない。どっちにしても、ここで二人で話を続けるよりは、真琴と一緒にものみの丘に行けば、天野も納得するに違いない。

「とにかく、放課後つきあってくれよ。真琴と一緒にさ」

話題を締めるように切り出した俺の言葉だったが、それにとまどう様子もなく、天野はすぐにいつもの表情に戻って、

「はい、分かりました」

『風の約束』

と短く答えるのだった。

そして、放課後。

真琴がちゃんと来ているかどうか、少しだけ不安に思っていたけど、それは杞憂に終わった。昇降口で一緒になった天野と校門へと向かうと、門柱にもたれるように立っている真琴の姿を見つけたのだ。

「よお、待ったか？」

ぼんやりとしている真琴に向かって俺が声をかけると、真琴はためらいがちに視線をこっちに向けてきた。

「うん……」

どこか不安げな口調。その意味するものは俺の横にいた天野のことが気になってのことだろう。もちろん、それは天野にも分かったらしい。

「こんにちは」

すつと前に出て、真琴に向かって天野が挨拶をした。表情こそあからさまな笑顔ではないものの、その語調は穏やかなものだ。これなら、真琴もそんなに緊張することはないだろうと思っていたけど、そう上手くは行かなかった。

「あ……あのっ……」

「天野だよ。覚えてるだろ？」

真琴が口ごもったのは、人見知りするからと言うよりは、天野のことを思い出せないからだろう。しかし、天野の方はそんなことを全然気にしていない様子で、なおも穏やかな口調で真琴に語りかける。

『風の約束』

「天野美汐です。あなたのお名前は？」

「……真琴……」

何となくばつが悪そうにしながらも、真琴が自分の名を告げた。その様子を見ると、記憶がまるでないわけではないと言う感じだが、あらためて自己紹介をするってのも結構問題が抜けない気がするな…。

「わたしのこと、覚えてない？」

「あうーっ、そう言えば…覚えてるような…気がする……」

「あまり悩みすぎて知患熱なんか出すなよ」

天野の言葉に、真琴は頭に手を当てて必死に考え込んでいるようだったが、そんなのは真剣に悩んで思い出すようなことでもないだろう。そんな意味を込めて俺が茶化すように言うと、真琴は俺の方に向かって言い放つ。

「祐一じゃないんだから、そんなことしないわよっ」

どうやら、俺に対してはいつもの口調で言えるらしい。ま、そりゃそれで構わないが、天野に今ひとつ打ち解けていないのが気になるな…と、俺が二人の様子を交互に見ていると、天野が不意に真琴の頭に手をそっと添えながら、なだめるように言った。

「無理に思い出そうとしなくてもいいから、ね…」

「あうー……」

すると、真琴のやつも急におとなしくなってしまう。そればかりか、少し恥ずかしそうにしながらも、天野の手を払おうとはしなかった。

そうか、そうなんだよ…。

『風の約束』

真琴は天野のことを忘れていたわけじゃないんだ。

確かに名前とかは覚えていないかも知れないけど、天野の優しさや暖かさは忘れたりしない。そこにはあらたまってる挨拶みたいな、余計な言葉はいらないってことなんだよな。

「それじゃ行くとするか」

ともかく余計なことなどいらなくてことを確認できた俺は、二人の返事を待つことなく、すっと歩き始めた。

歩き始めてしばらくの間、真琴は天野と並んで歩いていたのだが、その間に何の会話もない上にく、気がつくとも真琴は俺の横にいて、天野は俺の後ろにいる。まあ、この二人で会話が弾むような状況を期待する方が、無理なものかも知れないけどな。

それでも、俺としてはもっと普通の女の子らしい天野を見てみたい…なんて思っていたりするので、相変わらずダンマリの二人に向かって、

「なあ、二人して、何黙ってんだよ？…お前ら友だちなんだろう？」
と声をかけてみた。

真琴はうつむいて何も答えなかったが、天野は真面目な表情のまま俺に答えてくる。

「それはそうですけど」

その表情は困ったようには感じられないものの、言葉にはかすかに困惑の色が含まれている。

「だったら、友だちとして真琴に普通に接してみろよ」

俺が言葉を続けると、天野はさっきよりも少しだけ表情に変化を見せた。

『風の約束』

「友だちとして、ですか」

少しだけ困ったような表情の天野は、ちょっとぴり新鮮な気がするから不思議なものだ。いや、俺としては、もっと色々な天野を見てみたいんだけどな。

「ああ。ほら、真琴も天野とちゃんと話してみろって」

相変わらずダンマリのまま、俺の様子をうかがっていた真琴の背中をトンと軽く押して、天野と向かい合うようにさせる。

「わあっ、押さないでよっ」

照れ隠しのつもりなのか、真琴は正面の天野ではなく、背中を押しした俺に向かって文句を言うが、この際そんなことはどうでもいいんだ。

「俺が邪魔なら、少し離れてるけどな」

文句を言う真琴を無視するように俺が天野に訊くと、天野はまたもいつもの真面目な表情で答えてくれた。

「いえ、いいですよ」

こうなっては真琴も逃げ場はない。真琴は上目づかいに俺と天野を交互にちらちらと見ながら、観念したらしい……って、逃げ場とかそんなことを言ってるような場面じゃあないとは思うんだがな。

しかし、ことはそんなに簡単には行かないらしい。

「あうーっ」

「……………」

「あうーっ……」

『風の約束』

「……………」

「あう……………」

「……………」

真琴は真琴であうあうしか言わないし、天野は天野で真琴をじつと見つめているだけ……。こんな調子で、二人の間にまともな言葉が交わされることもなく、ただ時間だけが流れて行った。

「…やっぱり駄目か」

その場の雰囲気重さにこれ以上耐えられなくなった俺が、二人に向かって言うと、そこでようやく二人とも言葉を発した。ただし、それはともに俺に向けられたものだったが。「普通の友だちって言う感覚がよく分からないものですから」

「そうよお、いきなり『話せ』って言われても、会話なんかできるわけないじゃないのっ」

いきなりの「楽しい会話」ってのは無理だったか……。それにしても、俺に文句を言うてるあたりについては、二人仲良く揃ってるじゃないか。いづれにしても、これなら焦ることもないか。

「悪かったな、二人とも」

これ以上この話を続けると、真琴がまた騒ぎ出すかも知れなかったので、苦笑混じりにごく簡単に謝り、俺はまた二人に背を向けて歩き始めた。

真琴は一瞬だけ怒ったような表情をしていたが、何も言わずにまた俺の横を歩き、天野も俺の後ろを歩いている。

『風の約束』

その後、俺たちは特に会話を弾ませるようなことはなく、黙々とものみの丘へと向かっていった。

商店街を抜けて、丘へと続く道をひたすら歩く。

時々二人の様子を見ると、真琴は少しだけ不安そうな表情をしていたが、天野はきゅつと口を閉じて、ほんの少しだけ険しい表情をしていた。

それは昨日の俺と同じだったのかも知れない。不安と期待が入り交じり、ものみの丘へ行くのを一瞬ためらった俺と。だけど、丘に来れば分かることだろう。不安に思うことなど、何も無いってことが。

やがて、俺たちの前に草原が見えてきた。

もうすぐだ……。

そして、ものみの丘に着いた時、それまで何も言わなかった真琴が、そとつぶやくように訊ねてきた。

「ここ？」

「ああ」

「…何だか懐かしいような気がする」

俺の答えを聞いているのかいないのか、それもよく分からない。真琴はぼんやりと丘を見つめているだけだ。

「そうか」

「ずっと昔から知ってるような…」

真琴がまたぼつりと漏らすと、不意に天野の声が重なった。

『風の約束』

「それ以上は何も知らなくていいの…」

「…天野さん？」

突然の言葉に、真琴が天野の方をそっとうかがうようにすると、天野は伏し目がちにさらに言葉を続けた。

「だって、あなたはここにいるんだから。…だから、昔のことなんて…何も分からないままでいいのよ…」

その天野の表情は、前にも見たことがある。真琴の存在は一瞬の煌めきでしかない、と俺に告げた時だろうか。悲しい別れが俺に訪れる、と告げた時だろうか。いずれにしても、天野の表情には確かに悲しみの色が含まれていた。

「天野…」

「すみません、わたし、やっぱり駄目です」

「そんなことないって」

「でもっ…」

天野が何かを続けて言おうとした時、丘全体に強い風が吹いた。

「ぎゃあっ…」

真琴は思わず目を閉じて、顔を伏せている。だけど、俺は強い風にも関わず、全然気にならない。そればかりか、その風には、言いようのない心地よさを感じているくらいだ。ふと見ると、天野も同じらしく、俺と天野は風の吹いてきた方向を、目を閉じることなく見つめていた。

そして、風の音に混じって、何かの音が聞こえてくる…。

『風の約束』

“狐^{わたし}たちは二つの代償を払って、一瞬の奇跡を起こすことができる。

でも、その一瞬の奇跡は、ふれあった人に大きな悲しみを残した。

それは狐^{わたし}たちも望んではいないこと。

悲しい別れをするために、一瞬だけの奇跡を起こしたんじゃない。

ただ、会いたかった。

ただ、一緒にいたかった。

…それだけなのに。

それに、狐^{わたし}たちはその力で、もう一つの奇跡を起こすことができる。

だけど、悲しみにとらわれてしまった人は、もう一つの奇跡に気づかない。それがあることすら、分からない。

だって、奇跡を起こすのは悲しみじゃない。絶望じゃない。

それは、希望。会いたいと強く願う、想い。

でも、一人だけじゃ、一つの力だけじゃ、奇跡は起こせない。狐^{わたし}たちが二つの代償を払ったように。

だから、二人。

だから、奇跡は起きた。

だから、その子はずっと一緒にいられる。

ずっと……”

『風の約束』

それは昨日商店街で、心地よい風とともに聞いたのと同じ言葉だった。やはり、あれは俺の思い違いじゃなかったんだ…と、俺が心地よい風の余韻に浸っていると、

「わあっ！ な、なにっ？」

不意に慌てた様子の真琴の声がした。

何ごとかと思つて真琴の方を見ると、天野が真琴を抱きしめるようにしていた。ちなみに、俺には困つた顔の真琴と、天野の背中しか見えない。

「天野？」

俺が天野の背中に声をかけると、天野は肩を小さくふるわせながら、

「…すみません、ちょっとこのままに…させてくれませんか」

と答えるだけだが、その声は明らかに…涙声だった。

こんな状態で、天野が何故泣いてるかなんてことを考えるのは、無粋の極みだろう。真琴にしても、相変わらず困つた様子だったが、天野を避けるようなことはしていない。

「だとよ、真琴」

「あうーっ…」

「ごめんなさい…」

俺と真琴のやり取りの後、天野は小さな声でそれだけ言うと、それからしばらくの間は、顔を上げることはなかった。

そして、天野がようやく真琴から体を離して顔を上げた時は、すっかりいつもの天野の表情に戻っていた。

「落ち着いたか？」

『風の約束』

「はい…」

「それにしても、天野が泣くのとって、初めて見たな…」

「真琴もびっくりしちゃった…」

「忘れてください」

「いやあー、こればかりは忘れられるもんじゃないだろ？」

「相沢さん」

怒ってるような表情を見せるけど、その語調は言うほど強くはなく、天野が決して怒ってるわけじゃないことが分かる。

「いや、何て言うかな。うん、本当に天野も女の子だったんだなってな」

「わたしのこと、今まで男だと思っていたんですか？」

天野は冗談のつもりなのか、それとも本気でそう訊いてるのか、どっちにしても、その表情はいつものように真剣な面差しだった。まあ、冗談としては今ひとつ笑えないけどな。

「違うって。ただ、な…」

「はい」

「結構可愛いなって思っただけだよ」

「あ……相沢さん……」

俺が真剣な表情で答えると、天野の表情はとまどいと驚き、そして、ほんの少しだけの恥じらいに染まっていた。

「うん、今の表情もなかなか女の子してるぜ」

「かっ……からかわないでください」

『風の約束』

顔を赤らめながら、ぶいっと俺から視線を逸らす天野のしぐさは、やっぱり女の子していた。うん、こんな天野も悪くはないな。

「別にかからかかってるわけじゃない。俺はいつだって真剣だ」

真剣にからかうことはあるし、この場合もそれに違いないのだけど、この際それは置いておくとしよう。

「やめてください」

「これならそのうち、お前の本当の笑顔も見れるのになって、ちょっと期待してるんだけどな、俺は」

天野の本当の笑顔。それは実際に今まで見たことはない。

「相沢さん……」

天野は困ったようなかすかな笑みを浮かべている。

こんな風に、かすかな笑顔はいくらか見ているものの、本当に明るく笑う姿はない。確かにこれはこれでいい、とは思う。だけど、過去の悲しみにとらわれてちゃいけないって俺は思う。

だから、俺は天野にそんなことを言った。もちろん、今すぐにそんなのを見せろなんて言いやしないし、俺の言いたいことは天野にも分かっただろう。

「ま、今すぐとは言わないけどな……」

そして、俺が笑いながら天野にそう言った時、不意に真琴の声が重なってきた。

「祐一っ！」

まったく……。場の雰囲気とか秩序なんてものは一切お構いなし、だな。やっぱり傍若無

『風の約束』

人などころも変わってないな。

「何だよ、いきなりお前は」

あからさまに俺が不平を表情に出しながら訊いても、真琴の方は気にしてる様子はない。

「思い出したことがあったの」

へへーん、すごいでしょっ！…と続けて言いそうな態度である。

「何だよ？」

「真琴は祐一とは前に会ってるのよね？」

思い出したことがあると宣言したくせに、俺に確認を取るのも何だか妙だとは思うけど、

ひとまず俺は素直に答えてやることにした。

「ああ、そうだよ」

俺の肯定を受けて、真琴の顔がほころぶ。と、同時に納得した表情も見せている。

「それじゃあやっぱり、あれは祐一なんだ」

「何がだよ？」

俺には未だに真琴の言いたいことがよく分からない。思い出したとか、やっぱりとか、

あれは俺だったんだとか、一体何のことだろう？

とりあえず次の言葉を待っていると、おもむろに真琴が言い出した。

「ホラ、この丘で…」

が、その瞬間に俺は思わず声を上げてしまった。

「げっ！」

「相沢さん、どうしたんですか？」

『風の約束』

たぶんその時俺は思いっきり苦い表情をしてたに違いない。俺の方をうかがう天野の怪訝そうな表情を見て、俺はそう思ってしまった。

「いや、何でもない。…で、真琴、何だって？」

俺が真琴に向かい直すと、幸いにも真琴の様子は特に変わってない。

「誰かと約束とか誓いをしたような気がするって言ってたでしょ？ あれって、祐一とじゃないのかなあって」

この丘で約束と言ったら、やっぱりあの時のやつしかない。でも、それはあの時の真琴に言ったものであって、今さらそれを言われるのは正直言って恥ずかしい限りなのだ。とにかく、この場はごまかさないとマズイ。

「そ、そうだ。天野、お前んち遠いんだっけな。さて、帰るとするかあ」

少々無理があるかも知れないと思いつつ、とりあえずもっともらしい理由を付けて、俺は強引にでも引き上げようと試みた。

「別に構わないですけど」

「何慌てるのよう？」

が、二人ともその辺の機微は汲み取ってくれないらしい…って言うか、もしかして、分かかってそうしているのかも知れないな。

「誰が慌てるって？」

「相沢さんです」

「そうそう」

「そりゃあ、気のせいだ」

『風の約束』

「真琴が思い出したらマズイことでもあるの？」

と、怪訝そうに俺を見つめる真琴。

「そんなことはないぞ」

と、はっきりと否定する俺。だが、唐突に真琴が声を上げる。

「あーっ！ 真琴との約束って……」

「あうーっ、勘弁してくれえ」

天野もいるところで、『ずっと一緒にいる約束をした』だの、『結婚式を挙げた』だのと
言われたら、そりゃめっちゃくちゃ恥づかしいじゃねえか。

「『肉まん食べ放題させるーっ』とか？」

「……何だそりゃ？」

俺が拍子抜けした声で返すと、真琴もまた少しがっかりしてるようだった。

「え？ 違うの？ それじゃ『漫画を何冊でも買ってやるー』とかあ？」

「……それはそれで困る」

「あうーっ……それも違うの？ それじゃ一体なんなの、真琴の約束……」

要するに、俺の取り越し苦労だったか……。まあ、こんなことは無理に思い出さなくても俺が分かっているからそれでいいんだ。

「俺の方はちゃんと分かっているから安心しろって」

そう言いながら、ぼん……と真琴の頭に手を置くと、真琴は困ったような表情をしてみせる。まあ、そんなところもこいつらしくて……可愛いじゃないか。

「あうーっ、それじゃさっぱり分からないのと同じよう……」

『風の約束』

「まあ、食べ放題とは行かないけど、帰りに肉まん買ってやるから、許せ」

「うーん…まあ、それで許してあげるとするかっ」

現金なやつと言うか、単純なやつと言うか、とにかく真琴は俺の申し出に簡単に乗ってきて、満足そうに笑っている。

「本当に楽しそうですね、相沢さん」

そこに天野の声。その表情は、まだかすかではあるものの、楽しそうに笑っていた。天野もそんな表情ができるんだな…と、今さらながら感じてしまうくらいだった。

「そう言うお前だっけな」

「はい、相沢さんと真琴の二人を見ると、わたしも楽しいですよ」

「それはそれでいいことだ。一人でつまらなそうにしてるより、何倍もましってなもんだ。なあ、真琴？」

「えっ！…う、うん…」

「ええ、本当に…そうですね」

天野がまたかすかに笑う。だけど、それは今までの笑顔とは少しだけ違って見えるようだった。以前に比べて何がどう変わったと、具体的には言えないのだけど、何となく見えて安心するような笑顔だ。

「それじゃ、帰るとするか？」

「祐一、約束っ」

「分かってるって」

「わたしもつき合っているんですか？」

『風の約束』

「ああ、それじゃ行くとするか」

俺が二人に向かって声をかけて、ゆっくりと街の方へと歩き始めた時、ものみの丘に風が舞った。

優しく暖かい、風が。

その風に心地よさを感じながら、何気なく俺は空を見上げていた。

そこにあるのは、蒼く澄んだ空。

俺のそばには、真琴の元気な姿と、明るさを見せ始めた天野がいる。

「春ももうすぐだな」

「そうですね」

「真琴、春が一番好きっ！」

そんな俺たちの言葉も、澄んだ空と優しい風の中に、とけていく。

ものみの丘にいる獣たちの、約束とともに。

『風の約束』

『風の約束』あとがき

この話は前作『クロスフェード』とワンセットになるものです。もちろん、前作を書いた時点で、真琴がなぜ帰ってこれたのかは自分の中では出来上がっていましたし、きちんと書いた方がいいと思います、このような作品になりました。

私が中で挙げた「奇跡」は、単なるこじつけと言えるかも知れませんが、これを読んだ人たちに受け入れられるかは分かりません。ですけど、これが私の想いであり、願いなのです。

この作品のタイトルにある「風」という言葉。何というか、これもまたこのゲームにおける一つのキーワードのような気がします。色々な思いがその中にあるでしょうが、私はこの作品を書くに当たり、優しく暖かい春の予感を告げる風をイメージしました。(春の到来を告げる「春一番」だと、さすがに風が強すぎるので該当しませんが…)

一九九九年七月十四日 記

1999/07/14 初版 ash

PDF書式変更:2016/05/15